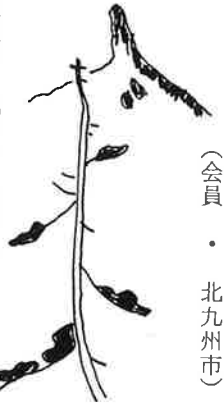
豊後の国尺間山の研究 ②

林　尚史
（会員・北九州市）



本論

尺間山の祭神は、軻遇突智・武甕槌・経津主の三神である。神仏習合した姿は、愛宕将軍地蔵と『古尺間経』（神道尺間獄開運講社本部発行。作成年代不明）にうたわれている。

尺間山を解明する一つの手段として、将軍地蔵（将を勝の字で該てる場合もある。両方とも同じ）とはいかなるものかを探ってみることにする。

将軍地蔵については、『妙法蓮華経三昧秘密三摩耶経』（卍蔵続一・二・三）に出ており、その姿は、鎧冑に身をかため、太刀をおびて、悪業煩悩の軍を調伏する姿で記されており、本来の円頂形で温和な地蔵の姿はなく、悪霊を降伏させる荒神としての姿が明確に出されている。

この儀軌について、堀一郎氏はその著書（『我国民間信仰史の研究』六九〇頁。㈱東京創元社昭和三〇年）の中で、呆宝の秘釈があり、勝軍地蔵信仰は寛平以前（九世紀の終わり）に既にあったもので、古代信仰の発展形態としてとらえることができるとしている。

平安初期の将軍地蔵信仰を彷彿させる記術が、坂上田村麻呂の埋葬において、『清水寺縁起』にみられる。

「弘仁二年五月十七日庚申戌二刻葬於山城国宇治郡栗栖村。干時有勅調備甲冑。兵杖。剣鉾。弓箭。糒塩。令合葬向城東立窆。・・（中略）其後若可有国家之非常。天下之交難者。件卿塚幕之内。宛如打鼓。或如電雷。・・（以下略）」（『大日本仏教全書寺誌叢』二二六頁）とあり、勅令により、立ちながら武装して葬られ、国の守護を祈願した記事がみられる。

こうした我国の古代信仰について、柳田国男氏はその著作『石神問答』（『定本柳田国男集』十二巻。筑摩書房昭和三十八年十一月二十五日六〇頁）の中で次のように述べている。

「小生は、大将軍将軍塚の　将軍　、勝軍地蔵

の　勝軍　は、共にあて字にて、語の意味は、其外に在るかと思ひをり候・・（以下略）」

さらに、その目的について

「・・（首略）・・地鎮と申さんか厭禳と申すべきか、兎に角、都の境に築きて邪神の侵入を防止せしものなることは、古より疑う者も無く候。」（同巻五八頁）

と述べ、防障・塞疫の神として四境を守るためのものであり、「勝軍」「将軍」は単なるあて字であり、「シャグジ」の転訛であるとしている。

尺間山に勧請されたとする山城国の愛宕神社の立地条件を考慮してみると、愛宕神社のある愛宕山は、丹波・山城の国境にあり、勝軍地蔵を本地仏としていることから塞神としての性格が強いとみなければならないだろう。

これについて、堀一郎氏は、愛宕社は、村境の山上にあり、村々の塞神信仰の対象であり、将軍塚信仰の宗教化とみている（『我国民間信仰史』六九〇－六九二頁）

地蔵の利益は、主に延命・防疾であることを考えるとこうした「シャグジ」の信仰と習合したことが推察される。

このような事柄を吟味するならば、尺間山のシャクマは、「シャグジ」の音声上の転訛であることが類推される。

それでは、どこから「シャグジ」の信仰が尺間山に入ってきたのであろうか。

それは、山城国の愛宕神を当地に勧請する以前に、尺間山には「シャグジ」信仰の原型があったのではなかろうか。このことに関連して柳田国男氏は、

「道祖神は、既に御承知も可有之通、本邦固有の神に非ざるに其帰化の最も古くして且其分布の最も広きこと・・（中略）・・シャグジは即ち石神なりと称して些も差支無之やうに候。」（『定本柳田国男集』十二巻七三頁）と述べ、「サエノ神」は、我国固有のものではないとしている。

尺間山の地理的条件を考えると、朝鮮半島に近く、大陸の影響を受けやすいのである。

周知の如く、近畿と九州との関係、また、朝鮮半島との海上交通は古くから頻繁であった。『日本書記』垂仁天皇の条に、

「（首略）阿羅斯等大歓之欲合　（中略）以入
日本国　所求童女者　詣于難波為比売語曽社神
旦至豊国国前部　復為比売語曽社神（以下略）」

さらに、序論で述べたように、海部郡は海人族の根拠地であり、郡内に臼杵（ウスキ）・佐伯（サイキ）など「キ」の付く地名がある。この「キ」は、朝鮮語（朝鮮語については、駐北九州韓国教育院の朴瀚奎院長の指導を得た）で「村落」を意味し、古くから朝鮮渡来系の人人が多く住んでいた可能性を示すものである。

『日本後記』弘仁六年正月の条に、

「壬寅。是日。停対島史生一員。置新羅訳語。」

また、『入唐求法巡礼行記』大中元年閏三月の条に、

「十七日。・・（中略）・・遇新羅人陳忠船。
載炭。欲往楚州。商量船脚。価絹五疋定。」

とあり、円仁一向は、新羅船に乗船した記事が見られ、九州・対島沿岸のみならず、中国沿岸にも新羅人が活躍していたことは疑いない。

尺間山は、海部郡内では屈指の高い山であり、頂上付近からは、佐伯湾をはじめ四国・豊後水道を一望できる。また、出征兵士（『元田の歴史』元田の歴史編さん委員会編集発行。昭和五十四年。一一九頁）が、海上から尺間山に祈念したとする手記などから、海上からも識別できるようである。

尺間山が、海上から識別できるとすれば、古代の海洋民族にとって航海上の目標となる山であったことも考えられる。しかも、佐伯湾から見れば、ほぼ西北（乾）の方向にそびえているのである。陰陽道では、乾の方角は祖霊の宿る方位とされている。さらに、尺間山の麓には尺間観音庵の宝篋印塔群があり、墳墓とも密接な関係がある。また、集落にそびえている点を考慮すれば、祖霊の宿る山として信仰を集める山とみなしてよいであろう。

それでは、朝鮮に「塞神」の信仰があるかどうかであるが、これに関連して柳東植氏は、その著書（『朝鮮のシャーマニズム』㈱学生社。昭和五十一年。五八頁引用）

「四方の城門をはじめ、庭や道路などにおのお
の守護神があるものと信じ、これを祭るように
なった。」

また、朝鮮には、村（『扶桑略記』天慶二年九月二日の条に、我国にも、これと類似した信仰があった）の入口に丸太で人間の顔を刻み、色付けした天下大将軍と地

下女将軍という神を祀り、一村の守護神としている。この神は、伝染病の流入を防ぎ、豊作の神として古来信仰されている。

大分県挟間町篠原には、大将軍神社があり、牛馬信仰で有名である。この神社は、本来、農作物の神であったとされるが、大分県の中央部が畜産業の振興から牛馬の神へと転じたのかもしれない。

『豊後国誌』（一二三頁）海部の条に、馬鎮大将軍祠について次のように記している。

「在佐伯荘堅田村。不知其粉。祭祀愛宕神社。此祀専祈請牛馬之疾。」

いずれも防疾の点では一致し、これらは一連の信仰に属する可能性が強い。

大将軍をハングルで書くと、장군となり、長星または将軍の意味になり、陰陽道の影響を受けたもののようである。

『由来記』（『尺間神社由来記』以下『由来記』と略す）に、「釈魔ケ獄ニ垂ル」、「頂上ノ松樹ニ金幣ノ懸レルヲ見ル」と記されており、これは朝鮮神話にでてくるモチーフを多分に含んでいるように思われる。

すなわち、天から降臨した天帝の子、檀君が、古朝鮮を開き、山神となったという天神降臨信仰、さらに、天神信仰が、山神信仰および樹木信仰へと発展していったのが、それである。

換言するならば、三韓時代（新羅・高句麗・百済がてい立した時代）に天神を祀った場所に、大樹に鈴や太鼓を掛けて鬼神を祀った蘇塗（三韓時代に天神を祀った場所）を素材にした『由来記』の記述であることが考えられる。

尺間山の開創者とされる御鱗性を、音声上から分析すれば、「オイラ」とは、慶州方言で、動詞の「来る」にあたり、現在でも「オイラ、オイラ」（来なさい、来なさい）という形で使用されている。

すなわち、「オイラ」とは、神を勧請する巫覡を意味することも考えられ、それが固有名詞化して性になった可能性も想像される。

また、尺間は「チエッカン」と読め、これは、距離的に近いとか、血縁が近いという意味を有することから、朝鮮との距離が当地と近いとか、血縁者が、その付近に住んでいたとも考えられる。

あるいは、海上より尺間山が見えた時、目的地が近いの意味で使われた可能性もある。いずれにせよ、朝鮮とこの地方との交流の深さを物語っていると考えられる。

将軍神は、「ショーグンシン」と読めるが、「グンシン」は、朝鮮語の「グシン」の転訛したものではなかろうか。

「グシン」とは、朝鮮語において、子供が親に言い付けを守らなかった時などに使う恐い神様のことである。ちなみに、尺間の神は荒神であり、将軍地蔵であることと相通じるものがあり、釈魔の「魔」の字をあてる文献もあるのは、こうした背景があるのではなかろうか。

尺間山の原初的信仰は、朝鮮半島からの大将軍信仰を基盤に、仏教の地蔵信仰が結びついたものであると推察される。

こうした性格を持った尺間山が、なぜこの地に必要であったのであろうか。塞神の性格が示すように、外からの不幸、災難の侵入を防止する目的があったのではなかろうか。

中野幡能氏は、その論文（『修験道にみる神仏習合』東洋学術研究第十八巻第四号八九頁）で次のような見解を披瀝している。

「日本民族には・・（中略）・・古い習慣の中には外部から来るものは、『疎び束る、荒ぶる神とし、穢れをもたらすもの』という考え方がある。それは、外国人が来たり、外国から帰ってくる使節にしても、京都に入る前には、邪鬼を迫放するために、『四角四境祭』の『祓』をせねばならなかった。

こうした古代の風習から、尺間山は海から入る人々やその人々に付随して入ってくる邪神を祓う性格を持っていたことが考えられる。

本来、この山は岐神の性格を持ち、聖なる山として、古代人の信仰が、山の開創以前からあったと考える方が妥当ではなかろうか。

それでは、養老元年に至って、殊更にこの山が脚光を浴びるのはなぜであろうか。

九州北部の主な修験の山の開創年代をみると、六郷満山は、養老二年、求菩提山も養老年間に開かれ、彦山においても大宝三年（七〇三）に『続日本記』に出ており歴史の舞台に登場するのである。注目すべきことは、こ

れらの山を含め、九州の山の多くが、大陸からの帰化僧によって開かれている点である。また、この時代は、数多くの呪術僧が活躍していたことが『日本霊異記』にみられ、養老年間に、朝廷がたびたび僧尼令を出していることなどから、何等かの中央政府の宗教政策の一端が、尺間山の開創に働いているのではなかろうか。

八世紀に、大和朝廷を揺した事件に、隼人族の反乱が挙げられる。この反乱は、朝廷の南九州支配に反対して起ったものであり、主なものだけでも四度（文武四年《七〇〇》大宝二年《七〇二》和銅六年《七一三》養老四年《七二〇》）ある。その最大のものが養老四年に勃発している。

養老四年の反乱に際し、八幡神はその先頭に立ち、法蓮を中心とする呪術僧の活躍などによって勝利し、国家神への地位を確立していくのである。

この時代に、九州の修験の山々が開かれた背景には、大和朝廷の九州支配の一環としてなされた可能性も考えられる。

『日本書記』持統天皇六年五月の条に

「己酒。詔筑紫大宰府率河内王等曰。宜遣沙門於大隅与阿多。可伝仏教。」

とあり、仏教を宣撫工作の手段として使い、呪術と布教による巧妙な南九州支配を意図したことも考えられる

尺間山は、豊国・日向の国境に近く、さらに先述した塞神としての性格を考えた場合、あながち否定もできない。

乱の中心であった薩摩・大隅から日向・豊後国境までは、かなりの距離があるが、

『三代実録』貞観二年十月八日之条に

「甲申。廃大隅国吉多。野神二牧。縁馬多蕃息害百姓之作業也。」

とあり、九州南部は馬の宝庫であったことを伺わせている。

『続日本記』天平十二年冬十月戊午の条には

「逆賊藤原広嗣率衆一万許騎。到板櫃河。広嗣自率隼人軍為前鋒。」

とあり、藤原広嗣の乱に際し、隼人が騎兵であったことを臭わせている。

また、『肥前風土記』松浦郡値嘉之条に

「此嶋白水郎　容貌似隼人　恒好騎射　其言語

異俗人也。」

とあり、隼人の分布が南九州に限らず、相当広範囲であったことを示唆している。また、馬を使用すれば、尺間山付近も、その行動範囲に含まれる可能性も出てくるのである。

こうした緊迫した情況下に、尺間山が、日向との国境の鎮めとして祭祀されたことも考えられる。また、隼人の持つ呪術性を封じる意味も、この山の性格に備わっているのではなかろうか。

尺間山の祭神は、天孫が葦原中国に下る前に出雲に至り、大国主神に国土を献上させた神々である。そして、ともに武神であり、剣に縁が深い国土経営を意味する神である。

武甕槌・経津主の二神は、それぞれ鹿島・香取の両神宮の祭神であり、関東東部に位置し、この二神を祀る神社は、東北へと北上していくのである。

これは、大和朝廷の東国経営の前進基地として両神宮が位置しており、出雲国譲り神話は、東国経営の歴史と二重写しとみることができると、高原三郎氏は、その著書（『大分の神々』双林社昭和四十九年九一―九二頁）で述べている。

また、堀一郎氏は、愛宕社の分布について、西方は宮崎・大分に点在するが、他は東北に偏在していると、著書『我国民間信仰史の研究(一)』（六九四―六九五頁）で述べている。

古代において、国土経営の手段として、神を祭祀した左証が関東・東北にある限り、九州においても考えてみる必要があると思われる。

尺間山に勧請された愛宕社は、少なくともこの地方の安定の使命があったことは承認されてよいだろう。

結　論

尺間山に関する文献は極めて限られており、本格的な調査はこれからである。その実情を明瞭にするためには、大分県南部の総合的調査・研究を待たねばならない。

尺間山の宗教形態は、一口に言って複合的重層構造からなるといってよい。

豊後が火山国という事情から生じたとみられる火神信仰、さらに大陸渡来と思われる塞神信仰と地蔵信仰との

習合、八幡信仰と熊野信仰などの宗教的重層性である。

海部郡は、『豊後風土記』にみられるように、海人族が勢力を振ったところであり、その点で、尺間山は他の山岳宗教とは多少趣きを異にしている。いうなれば、山の持つ本来の聖なる要素に、海人族の持つ航海上の標識としての信仰も考慮しなければならないと考える。

また、八幡信仰に重要な役割を果たす豊前地方の海人族と、海部郡の海人族との関係など、尺間山を解明するためには、朝鮮民族学をはじめ、多角的な研究が心要であると思われる。

熊野信仰の伝播においても海上路を考えてみる必要が大である。詳細は不明であるが、南海部郡蒲江町の沖に位置する深島には、みかげ石に刻んだ地蔵像と、砂岩に刻まれた役行者像があると『蒲江町史』（蒲江町教育委員会KKぎようせい昭和五十二年）に記されている。

熊野信仰と水軍との関係、そして、伝播については、こうした島の調査も必要になってくるものと思われる。

いずれにせよ尺間山の研究には、学際的要素が多分に含まれていることは明らかである。

『由来記』に示された神の降臨や、松樹に幣が懸っていたとする記述などは、朝鮮の宗教を想像させられる。

また、慶長元年の大旱魃のおりの雨乞いや、寛政十一年に、尺間山で雨乞いをするなどの事蹟から、竜神信仰の側面も有しているのではなかろうか。

武甕槌神は、水の霊性を備えており、水は天にあっては雲であり、雷になるもので、古代人にとっては、雷は竜蛇とされ、この神は、海岸にあって海人の信仰が厚く、その守護神の性格があるとされている。（横井健一『日本古代神話と氏族伝承』塙書房一九八二年二九五頁）。

天神・山神・竜神信仰は、新羅において盛んであったことや、尺間が「シヤグジ」の転訛であるとみられることから、朝鮮の大将軍信仰が、その低流にあると推測される。

また、防疾や地域保全の性格が、地蔵信仰と習合を遂げた可能性を考えると、尺間山信仰の原流は、朝鮮にある可能性が濃厚である。

尺間山開創については、養老元年という時期と、日向国境に位置する特殊性をとらえて大担な発想のもとに論を進めてきた。この時期、大和朝廷は、津令制を南九州に導入しようとして、隼人族の大反乱を誘発している。

特に、養老四年の反乱は、大隅の国司殺害に端を発し大伴旅人を征隼人持節大将軍に副将軍二人、動員数一万におよぶ兵力で対処し、鎮圧に七ケ月を要したことなどから、いかに大規模なものであったか想像される。

こうした緊迫した状況下に、尺間山をはじめ九州の山山が開かれ、それに伴う呪術僧の活躍、とりわけ法蓮の活躍など、この時期に何等かの中央政府の宗教的意図は働いていないだろうか。

尺間山の祭神が天孫系であり、かつ国土経営の神であることは、この山に愛宕信仰を導入した意図と結びつき山の性格を示す指標になると考えることができる。

一次資料

『尺間神社由来記』宝暦十一年　佐伯藩寺社奉行

『当浦王子大権現御棟札記』文化年間　疋田社家古文書

『神社明細牒』明治二十三年　大分県立図書館蔵

『豊国史談』　大分県立図書館蔵

楢木末実著『朝鮮の迷信と俗伝』新文社　大正二年

唐橋世斉著『豊後国史』二豊文献刊行会　昭和六年

柳田国男著『定本柳田国男集第⑫巻石神問答』筑摩書房　昭和三十八年

二次資料

官幣中社熊野那智神社編集『熊野三山とその信仰』名著出版　昭和五十五年復刻

篠田久万太著『大分県新誌　郷土新書44』㈱日本書院　昭和二十六年

堀一郎著『我国民間信仰史の研究①』㈱東京創元社　昭和三十年

松村武雄著『日本神話の研究(上)』ＫＫ培風館　昭和三十年

大久保貫之著『臼杵石仏』誠文堂新光社　昭和四十六年

倉田正邦著『近畿の民間信仰』㈱明玄書房　昭和四十八年

佐々木哲哉他著『九州の民間信仰ー熊野信仰ー』右同

高原三郎著『大分の神々』双林社　昭和四十九年

村山修一著『日本歴史叢書33本地垂迹』ＫＫ吉川弘文館　昭和四十九年

中野幡能著『八幡信仰史の研究（下巻）』ＫＫ吉川弘文館　昭和五十年
柳東植著『朝鮮のシャーマニズム』ＫＫ学生社　昭和五十一年
佐藤太郎・加藤賢成共著『豊後史蹟考・豊後全史』歴史図書社　昭和五十一年
松岡実著『九重山の修験者』（山岳宗教史研究叢書⑬に収蔵）名著出版　昭和五十二年
渡辺澄夫著『大分の歴史第④巻』大分合同新聞社　昭和五十三年
黒木俊弘著『肥前牛尾山の修験道』（山岳宗教史研究叢書⑬に収蔵）名著出版　昭和五十二年
中村明蔵著『隼人の楯』㈱学生社　昭和五十三年
川幅武胤著『日本神話の発見（上・下）』読売新聞社　昭和五十四年
鎌田茂雄著『朝鮮仏教の寺と歴史』大法輪閣　昭和五十五年
横井健一著『日本古代神話と氏族伝承』塙書房　一九八二年
溝口駒造著『火神信仰と念怒尊』密教研究64号
大山公淳著『密教神道の展開』密教研究79号
中野幡能著『修験道にみる神仏習合』東洋学術研究⑱巻4号
マンヌ・マリブッシイ『愛宕山の山岳宗教』（山岳宗教研究叢書⑪に収蔵）名著出版　昭和五十三年
佐伯市史編纂委員会編集『佐伯市史』佐伯印刷㈱　昭和四十九年
蒲江町教育委員会編纂『蒲江町史』ＫＫぎょうせい　昭和五十二年
弥生町文化財調査委員会『弥生町の文化財』㈲勉強堂美術製版社　昭和五十六年
元田歴史編纂委員会編集『元田の歴史』㈱南海新報社　昭和五十四年
吉良稔著『尺間神社騒動記』㈱南海新報社　昭和五十六年
大分大学教育学部編集『大野川・自然・社会・教育』ＫＫ新郷印刷所　一九七七年
神道尺間獄開運講社本部編集・発行『古尺間経』『尺間大神御神徳記』（尺間大神神拝詞に収蔵　但し、作成年代不明）